

## ペンテコステ

(聖霊にみたまされよう)

藤澤武義

教会側作製のキリスト教暦によれば、この五月三十日がペンテコステⅡ五旬節で聖霊降臨日とされている。その起原は使徒行伝第二章に記されている。

五旬節とは元ユダヤ人の「七週の祭」又は「初穂のパンの祭り」と称える第二の大祭を言う。最大の祭なる逾越祭の第二日(すなわち穀物収穫で刈り始める日ーレビ記二三9ー14)から数えて、第七週を経過した翌日、すなわち五十日目に行われたもの(同二三15ー21、申命記一六9ー12)。それで五旬節 Pentecost ペンテコステ(ギリシャ語的には「ペンテーコステー」、その字義は第五十日〔語根ペンテは五、ペンテーコンタは五十〕ユダヤ的にはニサンの月の十四日から五十日目)という。パレスチナ地方ではこの頃が穀物の収穫期であつて、元来この祭は収穫を感謝するためのもの。一日で終つた。

福音書によればイエス・キリストがニサンの月の十四日弟子らと逾越祭の晩餐を共にし、その夜半捕われ(太陽暦では翌日の)昼間十字架につけられ、死に給うたが、第一の五旬節、すなわちご復活後五十日目、この使徒第二章の五旬節である。

弟子らを含めユダヤ人の一般的考察からして、その期待したメシヤたる働きを主イエスが為し給わずしかも有力特権階級に憎まれて捕われ、十字架につけられるに至つたので、多

数の弟子らは次々に去りイエスをすてて皆逃げてしまい、真の弟子信者は一人もない状態になつた(ヨハネ六66、マタイ二六56、マルコ一四50等)。しかし主の復活の事実に接するや、彼らの信仰復興し、徐々に伝道も始めた。主は復活後「四十日間、度々彼らに現れて、神の国のことを語り」(使徒一3)そして昇天し給うたが(同9)エルサレムの信者はもろ二百二十人ばかりになつていた。十二弟子始め信者も「心を一つにしてひたすら祈りをした」(同1415)。

そしてこの五旬節に「彼らみな」多分十二使徒だけでなく、数十人か百人もの信者も共に集まつて一心に熱禱した。急に激しい風が天から吹き来るような音。聖霊降り各人の上に留まつた。特に使徒たちは聖霊に満たされ、エルサレム市内ことに神殿に出て行つて、み霊の啓示のまま、諸国語で、主イエス・キリストの復活とそれに基く救いの福音を熱心猛烈に証言し宣べ伝えた。丁度祭日だつたから、パレスチナ全土はもちろん、東はアラビヤや遠いエラムとメソポタミヤやエウフラエス大河の流域、更に印度近くまで、南はエジプト、北西は小アジア半島の殆ど全域、西は地中海のクレテ島、その南西クレネに近いリビヤ地方、遠くはローマからも離散のユダヤ人や異邦人中の改宗者も何万人も来ていた。使徒・弟子たちが聖霊充滿、その顔輝き喜びに溢れ、語学的に学んでいないのに自分たちの諸国語で、力強く、復活のキリストとその命の福音、救いを熱烈に絶叫するのを見、聴き、驚嘆にあふれた。

時にペテロが代表して立ち、一層聖霊に満ちあふれ、啓示と聖書に立脚し、堂々と主キリストの人類のための贖罪の死、殊に主の復活を歴然「われらはその証人である」と強烈

に証言し力満ちて絶叫、そして不信不徳一切の罪を悔改めて、主イエスを信ずるよう、み霊によって力説し切に奨めた。

これによりこの日約三千の人が悔改めて信者になったという(41)。この三千という数には疑問あり信じ難く、これは誇張して言ったものだとの批判もあるが、これを書いたのは熱心な弟子で科学者(医者)なるルカ、彼が虚偽を書くはずなく、事実とすべきである。尤もこの約三千人が、その時どの程度福音を悟ったか、その後どの程度純福音信仰に進んだかは疑問である。その後次第に迫害も起つて来たので、熱信に進まず、却つて信仰を落す者も出たであろう。それにしても聖霊によるすばらしい聖大業。この日にこんな著しい驚くべき出来事があったのである。よつてペンテコステの語は字義の第五十日の意を超えて、この聖霊降臨の大業の意に用いられるようになり、毎年復活節から五十日目をペンテコステ＝聖霊降臨日として記念の行事、説教などを行う教会が多い。日は限らず、無教会もやるがよい。

この日一日で大量の入信如何は別として、この聖霊降臨の一大事実を契機として、使徒・信者に対する聖霊の啓示と加力ますます著しく、彼らは純正キリスト信仰に進み、キリストの命・殊にその復活の命と力を霊に精神に肉体に受け、どんな困苦や迫害が来ても屈せず、烈火の信仰・燃ゆる伝道熱をもつて猛烈に伝道し続け、愈々邁進(平信徒も大いに伝道し)迫害のさ中に信者激増、福音前進、一世紀後半に欧州入り、亡国民・微弱な小民族の中から出たイエスー当時の有力者から憎まれ十字架につけられて死んだ史実は誰も知っているそのイエスーによる福音が、当時世界一の大強国なる 로마

を征服し、全欧州を席卷し、やがて全世界に弘まるに至つた驚天動地の一大事実は特筆大書すべきである。

この聖霊の働き、聖霊の力、その助けがなかったならば、この道が今は全世界に弘布し、世界一の大宗教となつた事実はありません。

聖書を読めば解るし、内村鑑三始め古来内外の優れた伝道者・大説教家が皆言っている通り、キリスト教は聖霊教である。聖霊によらなければ、信者個人の入信を始め、信仰前進、福音の奥義の解悟、恩恵の溢満、殊に有力真正の伝道はあり得ない。

聖霊によつてこそ罪の自覚を得(ヨハネ一六八)イエスを救い主キリストと信じ得(コリント一一二三。同章と一四章には御霊の賜物が多数記さる)神の真理・福音の真理・キリストを深く悟らざれ(ヨハネ一四一七、一五二六、一六三三、一七二二、一七二七、一七二八等)、肉欲に勝つ力を得(ロマ八二一、二二、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇)、天父に近づき得(同二一八、ガラテヤ四六)その他種々の恩恵が与えられる。真の信者は聖霊の宮である(コリント一三三、六九)。聖霊は我が神の国をつぐ保証である(エペソ一四)

しかも聖霊を汚す罪は赦されない、聖霊を冒瀆する者はこの世でも来世でも赦されないとあり(マタイ一二三二、その前後やマルコ二三二参照)実に戦慄すべきこと。この聖霊冒瀆の罪は不信者の犯罪だと考え易いが、必ずしもそうと限らず、信者も犯す場合あり、聖霊を受け熱心に祈りと聖書精読に励み聖霊に導かれて主の聖旨に適い、神の栄光となる信仰生活を続けていないと、信仰低調となり何時しか主の聖旨に反し

聖霊を汚していても気付かないことあり、実に恐ろしい。更に「キリストのみ霊」<sup>11</sup> 聖霊を持たない人はキリストのものでない（ロマ八9）亦同断。よく聖書も読み祈りと讃歌も上手、諸集会精勤、教会で洗礼聖餐等を重ねていても、聖霊なしでは救いが危うい。水の受洗はなくても、聖霊のバプテスマは是非必要なのである（マタイ三11等）。

されば何にもまして聖霊を求めねばならぬ。純正信仰により熱心に祈求せよ。必ず与えられる。天の父は、求める者に聖霊を賜わないはずがない（マタイ七12、ルカ一1913）。しかし単に祈りだけでは不可、聖言を実行する必要があるのである。

特に使徒行伝で最もよく判る通り、伝道上最も大切な要素また原動力は聖霊である。筆による場合然り、口による場合ことに然りである。大伝道者の使徒らを始め、ルター、ウェスレー、ムーデー、サンダーシング、内村艦三等々真に聖霊の器であったのだ。内村先生は他と型が違うが、例えばあの誰も真似ができない独特の霊文を見よ、聖霊に満たされていまいと書けはしない。口の場合も同断。

教会陣には聖霊による伝道者が比較的多く、無教会には学問と知識によるのが多く、聖霊による伝道者が極めて少ないらしい。学と知も重要である。但し純信仰により、聖霊によらないと、それらは道をそらせ弊害を生じる危険あり。反対に狂信・狂態を聖霊による如く錯覚した例あり、切禱と不断の聖書精読必要である。真に聖霊による伝道にはそうした危険などなく、聴者読者が真に罪を悔改め、信仰に進み、種々の恩恵に富まされ、殊に永久に消えない力を与えられ、父なる神と主キリストへの感謝・讚美・尊崇が高められるのである。

る。集会のより必要き貴さは聖霊による講説や祈りで聖霊が動き給うこと。それを期し切禱の開会と出席肝要。先年来多集会で諸講演等拝聴、多くは運悪く聖霊の働きなく力不來。私は知よりも聖霊に満たされたい。

第二五五号（二九七一年六月号）

再臨はあるか、ないか

藤澤武義

（上）

「貴方は再臨ということを強調なさるそうですね、最近も二回雑誌の表紙に連載の警句の最後を再臨の字で結んであるのですが、再臨は特に大切なものですか、再臨とは何のことでしょうか。」

「感謝です。お答えする前に伺いたのですが、貴方はキリストをどれくらい信仰しておられますか、また聖書ほどの程度お読みですか。」

「未熟ですが、信仰し、また聖書も読んでおります。しかし「再臨」という言葉をまだ全然見たことがありません。どこに出ておるのでしょうか。」

「成る程、そういう人は多いですね。僕の知る限り、聖書には再臨という言葉は出ていません。」

「聖書に書いてないのに、強く説かれるのは邪道であり、間違いではありませんか。」

「中々厳しいですね。申し上げます。旧新約聖書の内容合計66巻、邦口語訳一七三五頁中に再臨の語は成る程一回も出てい

ないが、新約聖書に多いけれど再臨の意味で、『来臨』（原語パールシア）が24回（旧約には五回）だけ、しかし他の語でも表示しており、降臨、出現、現れ、到着、来訪、現れる、来る、主の日、人の子の日、キリストの日、その日等、旧約書中にも似た言葉が多分総計千回以上出ています。また預言的文句によつて示しています。世界で最初に再臨を言い出した人は二世紀中葉の伝道者かつ殉教者（165）Justinusだと言われているとおりです。

日本では僕の知る限り、ホリネス教会の創設者・監督中田重治（有名な米国のムーデイ聖書学院で学び帰国後、一九〇一年大伝道開始「四重の福音」提唱、その重要な一つが再臨）が多分初期に唱えた一人です。また無教会の創始者内村鑑三は明治中期から米国の親友ベルから度々再臨信仰を持ちつつ伝えるよう奨められたのに中々そうなれなかったが、妙齡愛嬢の召天に関連し、特に一四年第一次世界大戦起り、キリスト教国が交戦したのでその国々に対し絶望を懐き、聖霊の導きで再臨信仰に深く強く進み、これを伝えねばならぬと信仰熱し、一七年九月号主宰聖書之研究誌に公表、反響大きく、共鳴者続出、特に前言の中田監督、また同じ頃ムーデイ神学校を出て帰国した木村清松の三雄意気投合、同年秋から東京中心に再臨運動を起し、全国広範囲に再臨キリスト教講演を三年も続け大反響、再臨信仰に進む信者が多くなったのです。内村師は若く魚類学専攻、天文学も精しく科学者でもあり、文学や地理歴史にも精しく、キリスト信仰と聖書の立場からだけでなく、科学的立場等からも再臨を説いています。名著再臨問題講演集に収録しており、深く傾聴すべ

き内容で私もいろいろ教えられました。全集に出ております、ご一読お奨めします。」

「大分解つて来ました。その本も一つ読んでみましょう。ところで再臨、再臨！と力を入れて言われますが、一体何が来り臨む、出現する、誰かが再び来臨するとかいうのでしょうか。」

「そうです。他の何か又は人物ではなく、人類の救い主イエス・キリストです。千九百八十数年前ユダヤで処女マリヤから生れ（普通の誕生でなく、処女降誕）凡そ30才頃キリストとしての公生涯に入り、いろいろ貴重稀有の働きをし、最も重要なことは全人類の全罪悪を負い十字架について死に、三日目日曜早朝永遠の命に復活し、人類のために罪と死を滅ぼし（キリスト信者に信仰だけで罪の赦し、義と永遠の命、神の国天国への救を与えるという神の至愛・恩恵至極の福音を創設し）40日後雲に乗つて昇天し、父なる神の御座の右に在り、私たちを父なる神に取次いで救いに導く貴い働きを今も続けておられるそのキリストが、世の終末、世界の最後（の日）に必ず再びこの世界に來臨し、私たち信者に主と同じ霊的完全な復活体・栄光の体を与え救いを完成し給う。他方不信仰で反逆し罪悪を重ねている人々に対し、最後の大審判で（その間際でも不信・罪を悔改めて信仰すれば救われるかも知れませんが）皆絶望、永久極苦の刑罰、それらの人々は地獄の永久の滅亡に陥らねばならぬというのです。貴方も一つしっかりこの信仰に進まれるように祈ります。」

「一層よく解りましたが、もつとききたいです。」

（中）

「一層よく解つたと言いましたが、実はまだ解つたようでは解らない感じ、ボヤツとした感じですよ。それはお話を聞いて新しい疑問が起こった為かも知れません。その疑問とは、先程キリストが十字架に死に三日目に復活し40日後雲に乗つて昇天し、神の傍で私たちを神に取次ぐ働きを今も続けておられる、と言われましたが、つまりキリストは十字架の死後三日目に生き返つて今も生きておられる訳ですね、本当でしょうか。聖書の読み方や信じ方が足りないでしょうか、キリストが生きておられる証拠はどこにありますでしょうか、今も生きておられて昔のようにいろいろ人助けなど良い働きをしておられますか。」

「中々尤もな、また厳しいご質問です。この話合いは再臨問題が本筋で、ご質問事項は脱線となりますが、関連あり、同じ疑問の人も多く、都合上詳細解答は致しかねますが、少し申上げましょう。」

キリストが十字架死後三日目に復活されたのは、世的な生き返りⅡ蘇生とは違います。蘇生した者は何年か何十年後に必ず死んで了つて再び蘇生することは絶対ありません。キリストの復活は全然違い、再び死ぬことなき、新しい永遠無窮の命に（眠っていた者が目覚めて起上るようにより原語エガイローの意味の通り）起上がり給うたのです。その実状は四福音書の終り一又二章に詳しく描写しあり、復活の体は霊なる体で心霊と全く同様自由自在、姿を見せたり消したり、四方閉め切つた家にも自由に入出し、瞬間に大変遠方に行き得、幽霊とは違つて、話すことや物質の食物を（食わずとも

永遠に生き得るが、食おうと思えば）食うことも出来たのです。

数十数百の弟子・信者たちは、具（つぶ）さにその実状を視たのです。そのことは度々繰返し「我らはその事Ⅱ主の復活の（実見者たる）証人だ」とのこゝを使徒行伝（原意は「使徒たちの活動」の書）に反覆記載、また福音書にも詳しく説明しあり（コリントⅠ一五初段や他諸所にも重要記事あり）、また使徒行伝は使徒弟子たちが聖霊に満たされてキリスト復活の証し、広く福音伝道大活動の記録であつて、聖霊行伝とも言います。その聖霊とは換言せばキリストの御霊です。それによつて使徒たち大活動したのであり、換言せばキリストの活動であり、爾後の歴史・現代においても聖霊による伝道者・キリスト者の伝道や種々証しの働きについて同じことが言える次第、すなわちキリストが生きてい給う証拠と言えるのです。同じ原理によりキリストは今も生き続けておられ、霊的にキリスト者に宿り（キリスト者は聖霊を受けている者であり）キリスト者を福音伝道・キリストの証人として証言伝道や種々善行に用い給うのであり、キリスト者の存在そのものがキリストの生きておられる証拠だと言えるのです。

信仰不十分な不肖私の内にも霊的にキリスト生きてい給います。もしそのことがないなら、種々例証できませんが、一つ証言、50年前後昔、肺を主とし肋膜と腹膜も結核を病み（後程重症）貧と逆境で相当苦しみ、死んでいたに違ひないです。しかし御恩寵と深い聖旨により信仰一途に生きるように導かれ、内在し給う生けるキリストの活力強き命の力を頂いて生き得たのです。一昨秋保健所呼出検診で右上肺の空洞極小

化、今は老人結核で老人は殆ど不治なのに私は主の全能全癒で76才元氣。讚美感謝至極です。戦中戦後迫害や種々苦難試験に度々会い、身心弱いながら主の命の力で靈肉共に支えられ、今現に生きてい給うキリストが私の内にも宿り、その命の力を与えて下さっている証拠だという外ありません。

同例の実例は日本にも多分何万あり、信者多い韓国や欧米諸国には何十万何百万ありますよ。

さて大層優れたキリスト者も何か弱さあり、肉体は死なねばならず、地上では悪魔の誘惑あり、救は未完成ですから、ロマ書第八章に詳論され、断片的には他の書卷に多々記しある通り、キリスト再び来給うて救を完成し給う。すなわち救主と同じ永遠に生き得る靈体に復活、又はこの身のままその栄光靈体に変化させて下さり、かつ現世の如き諸悪皆無、悪魔のいない万事完全な神の国に信者を救い入れる救の完成のためキリストは必ず再臨し給うのです。」

「中々甘い説明ですね。しかしやはり解つたようで解らず、おぼろの感じです。いろいろ説明されましたが聞いてすぐキリストが生きている証拠として受取る気にはなりかねます。あなたが昔結核の病気をされ、普通なら死ぬほかに死なずにすんだのは、今も生きておられるキリストの力を受けたお蔭であり、キリストが生きておられる証拠だと言われたけれど、それは貴方の主観論であつて客観性がなく、主観的な話は信用できません。」

「成る程、巧みな、厳しい論法ですね。しかし前回同様、少し脱線の話ですが、折角ですから答えましょう。私の前言は客観性なく信用ならぬとのお説、尤もらしいお話ですが、舌

足らずの感じです。主観的だのご批判、前言だけではそうとられるかも知れないが、私としては然らずです。

今ここに昔の病状や病歴等を詳述（記載）することは、小誌の使命また性格上致しかねますが、経緯上簡短に申しませう。50余年前四回結核（後程重く）療養、三回目は両胸肋膜炎、四回目は可成り大喀血の肺病で一か月絶対安静、唯一の家族の父遠在、貧窮涙苦に信仰を鍛えられ切禱、徐々恢復しました。36年二・二六事件、祖国の一大事、日に一食で平和安泰と熱切禱約一か月。雪の中伝道しつつ倉吉の山奥から一m余大雪の中、重い自転車を担いで何回も雪中に倒れて山越え、逆境結核重病訪問、津山と長島愛生園間往復。帰途は西方久世と勝山、新庄から著名四十曲峠また大雪、自転車担ぎ越え、少々無謀な車旅一週。翌朝から食欲減と三個位血痰喀出、受診や静養せず、毎日自転車で伝道等でした。

13年前市衛生課から一年以上度々通達、保健所で二回目に断層X線で右肺に空洞三つ発見され、治療ことに手術の必要ありとのこと、親しい内科医もそれを説奨されたが、40年位昔に出来たに相違なく、必要なしとて断りました。以後四、五年間毎年断層写真、また中嶋医院で受診かつ或病状の故に四年前春熱誠奨められ断れず（多時費し惜し）国立大医部病院で他の諸検査の後胸部断層写真、空洞小さくなっている由でした。その初秋また保健所呼出あり、数月後行きX線の結果、空洞大層小さくなり、気管枝拡張症程度に考えてよく、結核患者登録から外されたのです。11年前秋右保健所での断層写真と中嶋医院での平面写真各フィルムを頂きおり、お希望ならお目にかけます（更には右保健所と医院や病院で確か

め下さい)。かく医学的即科学的に歴然たる事実これをしも主観論と言われませんか。

近年は青少年に結核患者殆ど出ず、また早期発見早期治療で容易に治るが、50、60才以上は中々治らず、大部分が長く養生して死ぬのに、信仰不充分でも戦時中から主エス・キリストに献身し一切を委ね、ガラテヤ書第二章19、20にある通り、私の内にもキリストが生きて下さっており、在世中特殊難病や大長病も即座に医し、死者ことに死後四日たち臭くなつていたラザロを容易に生き返らせ(ヨハネ一章)、数々の奇蹟を行い給ひ、自ら十字架死後三日目に永遠の命に甦り今も明らかに生き続け、信者救拯や治病奇蹟、執成し等を成し給ひつつある生けるキリストが私にも宿り生き給うてかかる奇蹟を行い給うたのです。この客観的生き事実を打消されましようか。小なりともまたキリスト生働の証拠でしよう。

更に近年キリストのみ霊・聖霊を、時に豊かに受けさせて頂き、毎年他地方巡廻伝道、3、4年前連続韓国、昨秋ブラジル等巡廻、本春夏関東東北信越北海道等でも無学無知失敗欠点多い者ながら、生けるキリストの御霊と力によつて証言させられ神栄を拝し得たことも同じ証拠と言えないでしようか。

キリストの信者内在は原則として全クリスチャンに与えられる恩恵ですが、体験的に確信できるのは真のキリスト者に限るでしょうけれど、その体験を得ているキリスト者は世界的に数え難く、またキリスト今も生き働き給ひつつある証拠であります。

現世には万病千苦あり悲惨な例も無数。文明進歩により治減する以上に新しい不治難病甚苦発生、今後増加し終末程激

増の筈。だが信者にその一切が亡んで皆無となる時が必来、それが再臨です。」

(下)

「上手に堂々説明され大分解つて来ましたが、まだ本当に分つたのでなく、キリストの再臨を信ずる迄に至りません。もつと教えて下さいませんか。」

「ではもう少しお話し致します。根本は聖書に教え又言つてあり、以前も申しました通り、再臨預言が聖書中に非常に多く(学者パーシュによれば旧新約書中約千八百五十節)それらを皆挙げて説明するには、毎日十時間以上一週費しても至難でしょう。何れ雑誌に徐々掲げたく考えており、読んで頂ければ幸いです。そこで再臨の必要性、再臨が必ずあるべきこと、必ずあることを少し申しましよう。

先ず神の経綸について。創世記の初め二章その他の記事で分る通り、神様は何十何百億年か昔に宇宙万有を創造、太陽や地球も創造し今も支配しておられます。また地球上の山野河海、その中の禽獣虫魚等一切の生物、最後に吾等人類を創造され、その歴史を支配して給うのです。子細の点で多少疑問も出ますが、それは一応お預けとして、聖書における人類の始祖と言われるアダムは神命に背いて墮罪、以後人類は罪性の遺伝を承け、人皆どんな聖人も靈的に神に対して罪を犯し、そのため死なねばならず、永遠の極度苦しい罰を受け、地獄の滅亡に陥らねばならぬようになったのです。実に哀れ至極!

そこで神様はこの亡ぶべき人類を救うべく、「その独子を賜わった程に世（の人）を愛し給うた。それは御子を信じる者が一人も亡びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハネ伝三16）とある通り、御独子キリストを世に降し給い、御子を特にその十字架と復活において信ずる者は一切の罪を赦され、義と永遠の命を与えられ、至上の祝福と光栄満つる天国に救われるのです。そして約二千年間に救われた信者、かつ今後も入信し救われるべき人々真に無数と言うべきです。しかし他方救われ得ない不信者は一層無数でしょう。ペテロ第二書三章九の聖言その他の愛訓等で分る通り、キリストと父なる神は、只の一人も亡び去るのを望み給わず、何とかして全人類を完全に救おうと欲してい給う。未だ救われず地獄の手前の牢獄・黄泉に居る魂にも福音を伝え救いの聖手を伸ばし給うのです（ペテロI三19、四6）。

しかし飽く迄も不信反逆を重ねる者は救われるべき希望なく、世の終末に御子キリスト再臨し給うて、信従し救われる者と不信反逆者・神の敵で永久苦罰、地獄行入者とを最後の大審判で裁判し判別し給う。このためご再臨は絶対必要なのです。かくキリストが終末の審判執行の為に再び来給うこと、聖書中に数多く預言があります（ヨハネ五24 25 28 29等、使徒二四25、ロマ一31、一2一16、三6等々）。

そしてその時、我ら信者の救いも完成されるのです。それ迄は、「罪を赦され、救われた」といつても、救いは未完成です。在世中いかに熱信者であつても、何か誘惑で信仰が冷え未信者同様となり、更に信仰を棄て背教者になると、救が絶望となるのです。故にご再臨の時、すでに眠っていた者を主は御自身と同じ完全霊体に復活させ給い、まだ肉体で在世中のキ

リスト者をば瞬く間に同じ完全霊体に変質せしめ給う（コリントI一51 52等）。そしてかく救われた信者は、永遠完全なる正義と平和の理想郷なる神の国に具体的完全に救入れられ、永遠に生き無窮の祝福と光栄、喜び感謝満足希望をもつて生きるのです。もう世的な意味での労苦も病も、特に罪悪など一切なく、人を誘惑し不信と罪に陥れる悪魔も絶対に居ない。神の永遠に一切の暗黒をも照らし明るくする強大な光が燦然と輝いているのです。すなわち主の再臨によつてかく救いが完成するのです。

次に信者またキリスト教のことを暫く離れ、不信の一般人また現世の問題。不信反逆で非神なる種々の偶像（日本では神社仏閣等々の命なき神仏等）や欲望の対象なる諸偶像、特に一般人の到達至難なる精神的不可見諸偶像を拝み、聖書的には日々罪の生活と諸悪を平気で重ねている人々、また彼らで満ち占領されている現世社会は腐敗墮落を極め、また種々不埒なる矛盾あり、造主の神に背反して地獄の形相を呈しており今や全く終末状態。でいろいろ教育や宗教、特志家特殊機関等により改良の働き、平和運動なども行われているけれども、聖書の意味において今の俗世が真に、特に本質的根本的、更に全世界的に善くなることは到底あり得ないのです。そこで早晚、聖書の霊的意味で近い内に（天父から審判その他の全権を受けておられる）聖子キリストが再臨して最後の大審判を執行し給うのです。

すなわち程度の差はあつても彼らは一様に不信反逆者なる故それに対する相應の報い所罰、かつ聖書真理に照らして各人の不信罪悪の行為に対して、それに相應らしい報い所罰を審判主キリストから受けねばならぬ。特に矛盾の反証者たる



極悪人、航空機輸入に関して驚くべき巨額を収賄しながら恬として恥じず政界にも一般社会にも強き勢力を持つている輩、その他種々の偽善者等には特に重き審判の罰が加えられるであろう。また一応不信者だといつても、その中に善良で善事を行つて来た人々あり、それぞれの現世での行為に応じ、それ相当の報いが再臨のキリストによつて加えられるのである。神の神聖さ正義と真実から、こういう意味の審判も絶対になくはならないのです。こういう事由からもキリストの再臨は絶対に必要です（関連諸聖句甚だ多し）。

更に「もろもろの天は神の栄光を現わし、大空はみ手の業を示す……」（詩篇一九）とあるように、天地万物自然界は、常に大体において美しく造物主なる神の栄光を顕現しているけれども、彼らも未完成であつて、長期間に天体間にも大異変あり、特に地上では人類始め一切生物に大被害を及ぼす異変天災絶えず、近年ことに多い感じます。特に禽獣虫魚間の弱肉強食など、可哀そう悲惨、時に目を蔽わしめるものあり。しかも逆に巨大な鯨も弱小な鰯の大群に襲われ、強大な猛獣等その他も微小の吸血虫等に斃される例もある。げに万物悲嘆難苦！、全被造物が今猶共に呻き苦しみ、虚無に服して居り、切に慕いて神の子の出現待望、滅亡の僕たる状態から解かれ神の子らの光栄の自由を切望（ロマ八19-20）。すなわち神の子キリスト再臨により全被造物のかかる難苦等一切が平定され彼ら皆救われ、自然万物全宇宙が完成されるので、かく再臨はゼヒ必要です。

Ⅰ 第三六四、三六五、三六六、三六七号

（一九八〇年七、八、九、一〇月号）Ⅰ